甲南女子大学蔵『源氏小鏡』解題と翻刻（下）

米田明美
中葉芳子

本稿は、甲南女子大学蔵「光源氏一部連歌寄合之事」（全三冊）の翻刻と解題を記す。

該本は、本大学図書館に残された売買記録によると、昭和四十八（一九七三）年頃に古書店から購入されたもので、昭和三十（一九五五）年三月に古典文庫により『良基連歌論集　三』（岡見正雄）として翻刻されている本の原本である。古典文庫には、書写年代も含め詳しい書誌なども記されておらず、また朱点・割注の取り扱いや翻刻誤りもある。古典文庫に掲載されてから長く所在不明になっていた故、諸本分類における該本の取り扱いも困難であったようだが、この度の調査により書写年代や伝来を含め、新たに判明した点もあるのでここに詳しく紹介したい。

今回は、該本の解題と前号からの続きの翻刻（三冊目　若菜上～夢浮橋巻）を示す。

二、解　題

本書は、「甲南女子大学蔵『源氏小鏡』解題と翻刻（上）」（『甲南女子大学紀要　文学・文化編』第52号、平成二十八年三月）、「同（中）」（『甲南女子大学紀要　文学・文化編』第53号、平成二十九年三月）で述べたように、『良基連歌論集　三』（昭和三十年、古典文庫）に岡見正雄氏により翻刻されている本の原本である。その後、詳細な研究はほとんどなされず、近年の岩坪健『『源氏小鏡』諸本集成』（和泉書院、平成十七年）でも解題が省略されている。本書全体の考察は、伊井春樹『源氏物語注釈史の研究　室町前期』（昭和五十五年、桜楓社）が唯一のものと言ってよい。

伊井氏は『源氏小鏡』諸本を系統に分類された際、本書を第三系統（増補本）第一類本に分類された。そして、古典文庫の翻刻により、次のように考察されている。

第一類本の『小鏡』としては、『源氏小鏡』（元陽明文庫主事小笹喜三氏旧蔵）・『光源氏一部連歌寄合之事』（古典文庫所収）の二本を見いだすだけである。古典文庫所収本は底本を記していないため所蔵者は不明だが、小笹本はこれにきわめて近似していた。なお、小笹本は室町中期の美麗な写本だったが、現在は人手に渡っている由である。本文は古本系小鏡にほとんど同じだが、ただそれに定家作と言い伝えられている『光源氏巻名歌』と、良基作の『光源氏一部連歌寄合』（古典文庫所収）とが加えられている。これは源氏寄合の集成を目的として、一冊にまとめられたのであろう。（八五八頁）

伊井氏が「第一類本の『小鏡』としては、『源氏小鏡』（元陽明文庫主事小笹喜三氏旧蔵）・『光源氏一部連歌寄合之事』（古典文庫所収）の二本を見いだすだけである」とされていることについては、既に「甲南女子大学蔵『源氏小鏡』解題と翻刻（上）」の「書誌」や「同（中）」の「伝来」の項で明らかにしたように、二本は同一写本であることが判明している。本書は京都大学国文研究室に写真撮影のために貸し出されていることから、伊井氏はその写真をご覧になったのであろう。

「本文は古本系小鏡にほとんど同じ」とされている。首肯できる見解であるが、

詳細に検討すると、目移りによると思われる誤脱が多く見られる上、敬語の有無、古語の相違などが散見される。古本系（第一系統）を基にしているとは考えられるものの、親本が善本ではなかったか、書写態度が粗雑であったためか、書写者が改変したためか、細かな箇所での異同は数多い。

「定家作と言い伝えられている『光源氏巻名歌』と、良基作の『光源氏一部連歌寄合』（古典文庫所収）とが加えられている」ことは、寺本直彦『源氏物語受容史論考』（昭和四五年、風間書房）に詳しく考察されているところである。寺本氏は本書について、

この本の各巻の内容を見ると、それぞれ三つの部分から構成されている。その一つは、各巻の簡単な梗概をのべ、その間に付合となるべき詞を注記しているのであって、実はこの部分は源氏小鏡（源概抄とも）とほとんど同文である。次の各巻の右の部分のあとに、巻中の肝要な詞句をあげ、ままこれに簡単な注を加えている。たとえば、桐壺巻頭では、「きりつほの・まきのことは・ちよくん・とふくうなり・おいすけて・こちごのおとなしき事なり・おもやせてぐるま・こしにかけぬくるまなり（下略）」などのごとくである。この部分はそのあげられた詞句、その順序、注記など、次にのべる「光源氏一部連歌寄合」とほとんど同様である。ただしこの部分は、正篇十巻と宇治十帖つまり二十巻ほどは欠脱しており、またその書かれている位置は大部分は巻尾であるが、第十六おとめ第十七たまかつらの二巻は巻頭帖名の下に細書してある（ただし、たまかつらでは、巻尾にも重複して書かれている）。右の二つの部分とともに「光源氏一部連歌寄合之事」には、さらにいわゆる「光源氏巻名歌」が附載されているのである。ただし「光源氏巻名歌」なる名称はもとよりなく、また五十四巻中、あさかほ・おとめ・たまかつら・はつね・こてふ・ほたる・とこなつ・かゝり火・のわき・みゆき・ふちはかま・まきはしら・むめかえ・ふちのうらは・若菜上・若菜下の十六巻は巻名歌を闕き、またその記入された位置は桐壺・帚木二巻は巻尾、他は巻頭帖名の下にあって、この巻名歌は後から補入された疑いがある。

（四二四～四二五頁）

と「光源氏一部連歌寄合」と「光源氏巻名歌」を中心に考察しておられる。寺本氏はこの連歌寄合と巻名歌について有無を記しておられるが、現状と異なるようであるので、表にしてまとめると次のようになる。

一冊目	連歌寄合	巻名歌
桐壺	巻尾	巻尾
帚木	巻尾	巻尾
空蟬	巻尾	巻名下
夕顔	巻尾	巻名下
若紫	巻尾	巻名下
末摘花	巻尾	巻名下
紅葉賀	巻尾	巻名下
花宴	巻尾	巻名下
葵	巻尾	巻名下
賢木	巻尾	巻名下
花散里	巻尾	巻名下
須磨	巻尾	巻名下

二冊目	連歌寄合	巻名歌
明石	巻尾	巻名下
澪標	×	巻名下
関屋	巻尾	巻名下
蓬生	×	巻名下
絵合	×	巻名下
松風	巻尾	巻名下
薄雲	巻尾	巻名下
朝顔	巻尾	×
少女	巻名下	×
玉鬘	巻名下、巻尾	×
初音	巻尾	×
胡蝶	巻尾	×
蛍	巻尾	×
常夏	×	×
篝火	×	×
野分	×	×
行幸	×	×
藤袴	×	×
真木柱	×	×
梅枝	×	×
藤裏葉	×	×

三冊目	連歌寄合	巻名歌
若菜上	×	×
若菜下	×	×
柏木	×	巻名下
横笛	×	巻名下
鈴虫	×	巻名下
夕霧	×	巻名下
御法	×	巻名下
幻	×	×
匂宮	×	×
竹河	×	×
紅梅	×	巻名下
橋姫	×	巻名下
椎本	×	巻名下
総角	×	×
早蕨	×	巻名下
宿木	×	巻名下
東屋	×	×
浮舟	×	×
蜻蛉	×	×
手習	×	巻名下
夢浮橋	×	巻名下

このように連歌寄合は一冊目はすべての巻にあり、三冊目はすべての巻になく、二冊目は九巻にあり、十一巻にない、という状態である。また巻名歌は桐壺～薄雲巻までの十九巻と、柏木～御法巻、紅梅～椎本巻、早蕨、宿木、手習、夢浮橋巻の十二巻、合計三十一巻に記されている。

本書に引用された連歌寄合について寺本氏は「そのあげられた詞句、その順序、

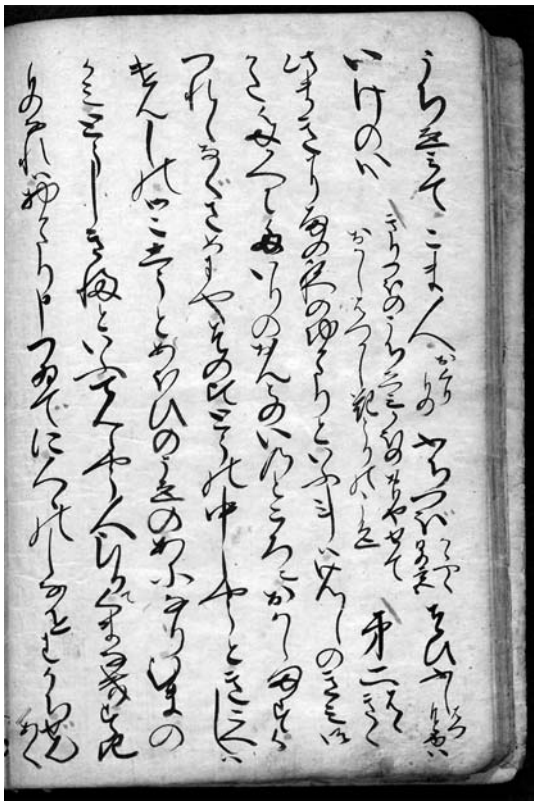


写真1　1冊目8ウ

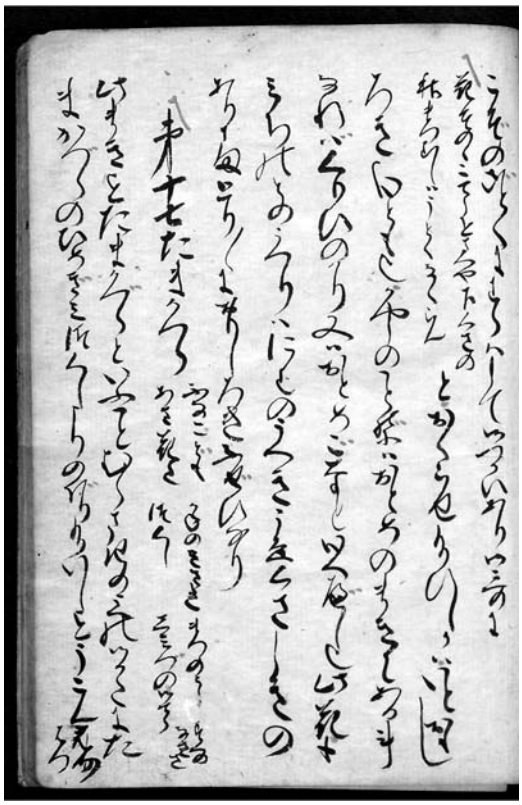


写真2　2冊目22オ

注記など、次にのべる『光源氏一部連歌寄合』とほとんど同様である」とされる。始めの方の巻は「ほとんど同様」と言えないこともないが、巻が進むにしたがって、「光源氏一部連歌寄合」との相違点の方が目立ってくる。本書の書写上の問題もあるのかもしれないが、「光源氏一部連歌寄合」を引用したと言い切れるかどうか、という疑問が残る。なお、巻名歌に関しては、諸書に掲載される巻名歌と大きくは異ならない。

前掲の表を見ると、連歌寄合も巻名歌も記された位置が巻名下や巻尾であり、増補された可能性が高い。ただ、その増補が何時なされたのか、が問題なのである。伊井氏は「源氏寄合の集成を目的として、一冊にまとめられたのであろう」、寺本氏も「『光源氏一部連歌寄合之事』は、源氏物語に関する連歌寄合の一集成を期したものではなかろうかと推測されるのである」（四二六頁）と述べられており、集成を意図したものであることは確かであろう。しかし記されている巻に偏りが見られることから、集成を途中で断念した可能性もあろう。また本書の誤脱などのミスの多さが、親本を書写した際のミスなのか、本書が原本で、作成する際のミスなのか、という疑問もある。特に桐壺・帚木巻の巻名歌の記された位置は、他の巻と異なっている（写真1、（上）6頁下写真参照）。玉鬘巻の連歌寄合は、巻名下と巻尾にほぼ同様の内容が記される（写真2参照）。これらも本書が原本であるのか、書写本であるのか、という問題と関わってくるのではなかろうか。

三、翻刻（若菜上～夢浮橋）

翻刻に当たっては、

・朱筆（句読点・濁点・合点）は、書写当初には無かったものと考えこれを省いた。
・行数および改行については、忠実に翻刻した。
・ルビが付されている場合、ルビはそのまま付けた。
・小文字の割注については《　》で示した。
・ミセケチ・重ね書き・補入については、
　ミセケチ　あ（い）

重ね書き　□(い)（下の字が判読不可の場合は□とする）
補入　補入記号のない場合　あ●(い)う
補入記号のある場合　あ○(い)う

「（紙）」とある場合は、小紙片に字を書き貼り付けてあることを示す。
・虫喰いにより判読不可の場合は、□□とし右に「虫喰」と傍記した。
・丁の終わりに　」を付して丁数を入れた。　」一オ
・寄合語が列挙されている箇所は、寄合語と寄合語の間に空白が入れられている箇所と、入れられていない箇所があるが、それも当該本の特徴と考えてそのままにした。但し、どちらとも判断し難い箇所は、空白を置くことにした。

第廿若な上

此まきをわかなといふことたまかつらのないしのかみ⋈
ひけくろの大しやうのきたのかたにていつしかわか
きみにしようけたてまつりて正月廿三日けんしの
ゐんの御かたへねのひのいわゐにまいり給へは御ふかくさま〳〵
めてたかりしにたまかつらの御歌《わかはさすのへのこまつをひきつれてもとのいはねをいのるけふかな》
とよみ給いし御返事六源てうのいん
《ひめこまつすへのよはひにひかれてやのへのわかなもとしをつむへき》　とよみかよわし給へり此心は
けんしの給ふ心ねにかくおはしましていわひ給へるうへ　」一オ
には四十のとしより十にみつとし御かといひてい
みしき大はうゑをおこないてふかくをとゝのへ一もん
一けの一たいしにいのりをせさせ給ふこと也これによりて
まつないし玉のかみの御こにし給へるゆへなれはねのひに
そへておはしましたりねの日といふは正月のねのひ
わのへのわかなをくきよにそなふることありこれにもわか
なのあつ物といふ事こゝろうゑしさてほとへてないし玉の
かみを見たてまつり給へはいと見まさりてもの〳〵しく□(み)
るかひありし御さまをけんしほめ給ふ也わかなに見るかひ　」一ウ
あるといふ事付へしたまかつらなとも候へしけんしの
御とし四十なれは四十のはるなとゝいふことよし御かと
いふ事は人のいのちをのふることにていわひのきしき
にてある也さて此まきにふちのうらはにとうくう今上へま
いり給ひし御むすめ明石中宮たゝならすおはしまして若宮う
みたてまつり給ふめてたかりし事也これをあかしの
うらにとゝまりしにうたうきゝつたへていかはかりうれ
しかりけん此よのねかひいまわみちぬれはふかき山に
こもるとてみやこのむすめ明石上のもときたのかたのあまきみ　」二オ
のもとへこま〳〵と文かきてのほせけり此人ゝのいのりをす
みよしにてたてまつりおきたるくわんもんをはこに
入てふうしこめてたてまつるこれをけんし御らんして
こそわかなのすみよしまいりといふ事ははんへりけれ
此あかしのうゑをまふけんとてみたりしゆめをもか
きたりそのおりの入道の歌に《ひかりいてんあかつきちかくなりにけりいまそ見し夜のゆめかたりする》
これをゆめものかたりふみにかきそへてはんへれはいかにも此
ことにはゆめかたりあかしのいわやなといふことあるへし
その比女三のみやときこえしは●しゅしやくいんのひめみやにて　」二ウ
おはします也あまたの御なかにいん朱の御覚かきりなき
御いとをしみおほしめしていん朱の御なやみのおりもちあつ
かひ心くるしくおほして六源てうのいんへ三女三のみやあ
つけたてまつり給ふ六源てうのいん御とし四十きさき
にてまし〳〵きこれそこのまきの下にかしはきの
ゑもんのかみにうきなたちかほる大しやううみ給ひし人
なりいつよりけんしには給へるなとゝいふ人あらは若なの
上に御とし十五にてむかへられ給いしなりとしるへし

ならひ若な下　」三オ

上にわかなのいはれあれはおなし事也此まきにはけんし
すみよしへまいり給ふうへにひめきみ春宮の若な
まふけ給へりといひつるみやいつゝにてとふくうにつか
せ給ひしなりこれはしゆしやくいんの御こにておはしま
しゝ也さて何事もすみよしのかみのめくみのありかたく
おほしめすによりてむらさきの上あかしの上はゝのあ
まうへねうことのなとおほしめすさま〳〵にひきつれてま
いりたまいし也比は十月廿日なりそのほとのことはにかれた
るおき《これすみよしのかれたるおきと いふ事かさしてまいるなり》まつはらにはる〳〵とたて
つゝけたるくるまかくらその時のしんきのことはなりすみ　」三ウ
よしにてむかしのすまあかしなにわのかたをみやりて
こゝろしる人には思ひ出し也さてもかの女三のみやをかし
わきのゑもんのかみ見たてまつりておもひかけたてまつり
し事はしやうくわんに春のすゑつかた六てうのいん
にてかすめるくれにおもしろきに此御かたのにわにて御
まりありゑもんのかみもまいり給へるにみやのかわせ給ふ
ねこをいつくよりかしらぬねこおひきたりてみすのう
ちへ入てさはけはみや立さわき給へりこれを女三の宮　」四オ
のたちすかたといふ也ねこのつなにてみすあきて御すかた
見え給ふそのおりよりやまひとなりてこいちにまよひ
給へりあさましかりし事なりつゝに此みやゆへそかし
身をいたつらになし、事申はかりなしそのほとのことは
にねこのつなひきはるの夕くれまりのたちすかたもやの
はしらにたちそい給いし也はしらなとその時のことは也さてゑもんのかみこのみやの
御めのとにこしゆといひし女はうさるたよりなれはか
たらひよりて文おおくり給ふそのことはにみかきかはらを
わけいひてかせにあたりてそれより心ちわひしくなと、　」四ウ

かきてやるこしゆ思ひよらぬ心ちしてあなか□(け)〳〵し
なとはかりかきて返事をやりし也はしりかきとはな
をさりにて心にもいらぬ事をかくなりかくてこしゆ
せめられてくちいれしてつゝにあわせ給ふ比は四月
なりその比むらさきの上なやみ給いていとたいしにおはし
けれはけんしいんもひたすらうちたえて此かたに
おはしませはよきひをゑらひてあわせ給いし也やかて
それよりはらみ給ふこれをけんしの御こといへりたゝ
ならすなやみ給へはむらさきの御事に又いかならんと　」五オ
心くるしくおほしめしてけんしおはしたれは•みや(さま〳〵)
わそらおそろしくかなしくてあひ給いしにそ
のよゑもんのかみゆめをみたるよし申きかせ給ひ
けれはさにこそと覚て御めに見あわせられすお
はしませは此ほとのとたへをうらみ給ふにやとおほ
しめしてなくさめさせ給ふほとにいとあつき□(比)
なれは夕かせたちてむらさきのうゑの御かたへかへり給はん
とし給へはにより三のみや御なこりをおしくやおほしけん
月まちてもといふなる物をとの給へはそのまにもや　」五ウ
とおほしめすといとをしくおほしてその夜はと(よ)ゝまり
給ふ此月まちてもとはほんかに《ゆふやみは道たと(と)〳〵し月まちて かへれわかせこそのまにもみん》
そのよとゝめたてまつり給はすは此事あらわれさらまし
といとかなしさてあさすゝみのほとにかへり給ふにけんし
かわほり(おふきなり)をおとさせ給てもとめさせ給ふに御しとねの
したにあさみとりのうすやうにかきたる文ありあやしく
おほして御かゝみなと御らんする所にて御らんすれはさた〳〵と
かき□(あら)りはしたるふみまかふへくもあらぬかのちうなこん
のてにてたまさかにあひたてまつりて心のまゝならぬこい　」六オ
のくるしさをかきたる文なりけんし心の中いかはかりか

ありけんこししゆ御かゝみなともちてまいり見はんへれは
昨日かのかたよりまいりたりしふみの色のをなしふみを
御らんすれは何となくむねひしけ給ふ心ちしてけんし
かへり給てのちみやにとひたてまつり給へはいさみし
ほとに入給ひしかはしとねのしたにおきたりしとの
給へはよりて見るにいつくのにかあらんかくと申せは宮は
たゝ御なみたならてはかこつかたなくおほしてそのほとの
みとりのうすやうのふみしとねのしたあらはるゝなとゝ　」六ウ
いふこと付へしそれよりけんしは人めはかりにてつ
ゐにそのゝちはあひ給はす心の中さこそとあわれにも
あさましくさてわかなのめくみといふことこれは女三のみ
やいまたゑもんのかみにあひ給はさりしさきなりしゆ
しやくいん五十の御かを御こたちつとめ給ふ此によさん
のみやつとめてまいり給ふへきにけんしの御もとにおはし
ませはさり共ならはかし給ふらんと御うしろことの
あるよしき、給ひてもとより心へさせ給ひたる事
なれは御まへにてき、所あるほととりたてゝよるひるな　」七オ
らはかしたてまつり給ふいとさと心へてならひとり給ふ
きみはかりつたへたる人もなしとほめたてまつり給いし也
うち〳〵にて心みんとてはるのよのとかにかすめる月の
よ御かた〳〵をよひたてまつりて御きかくありこれを夕
きりのたいしやうみすのそとにて御ことしらへてま
いり給ふ女三の宮きんのことけんしの大しやうもきん
のことなりされ共御こたち又かた〳〵の女はうにもつたへ
給はすして此みやはかりにつたへ給ふむらさきの上わ
こんねうことのしやうのことあかしのうへひはけんしはしやうか　」七ウ
し給ふふへはゆふきりの御ことひけくろの大しやうの
御こたまかつらの御はらこれらはいとおさなきほとにてふ
かせ給ふさていつれもとり〳〵におもしろしそのときか
の御すかたともを花にたとへさせ給ふまつ女さんのみ
やの御かたちをのそかせ給へは二月なかの十日はかりあを
やきのわつかにしたりそめてうくひすのはかせにも
なひきぬへくみへ給ふうつくしき御くしさうよりこ
ほれかゝりてやなきのいとのやうにしたりかゝり給へりむ
らさきのうゑはそのさまあらまほしくあたりもにほひみち　」八オ
て花とい□（は）ゝさくらにたとへてはるのあけほのにかす
みのまよりみゆるこすゑの花の心ちしてまことに
かきりなき御ありさま也ねうこのきみはこたかきこす
へのかたはらにならふ花なきありさまなりうつゝにもとき
わのまつにかゝるふちのさきこほれたる心ちして
よしありて見え給ふかゝる中にあかしのうへはこれも
御すかたあらまほしくもてなしてさつきまつ花たち
はなの花をもみをもおしおりたる心ちし給へり身
つからひわにうちかゝりたわやかにつかひなし給ひたる　」八ウ
はちおとをきくよりもなを見るにまさりたる
ためしなり又此まきにおちはの宮といふ事あり
これはによさんの宮にゑもんのかみあひたてまつりて
のち我きたのかたにもちたてまつるねうこのみやこ
の女三のみやの御あねそかし御はゝはそ□（の）すちもなき
けらうのかうい也しゆしやくいんにし山の御てらへ御くし
おろし給ひしよりによさんの宮はけんし給はり給ふ
ゑもんのかみもみやたちをちゝおとゝをのそみ給ひし
かは此ねうこの宮を給ておもひみたれてうちなかめてさん　」九オ
のみやにさもおとり給へるそかしと思ひて
《もろかつらおちはをなにゝひろいけん
なはなつかしきかさしなれとも》　かやうによみしより此宮をは
おちはのみやと申きかたちことのほかにしめやかにおはせし

人也おのにすみ給いしよりおの、おちはの宮と申也しるへし

第廿一かしわき　《かしわきのかほるはそれかよの中の なをこりすまのなみたくらへに》

このまきをかしわきといふ事けつけいうんかくをなそ
らふるにはゑもんのかみをかしわ木によそへたりうたにも
此人をかしはきとよみたりさて此女三のみやのことゆへ
にやまひかきりになりていまはのおりたいなこんになさる　」九ウ
この人し、たることこいといひきけんしすこしその心をほ
のめかしてさけをしゐて心よからぬ御めつかいをし給いしより
こ、ろのおにこにや也にけんやかて心ちかきみた•しなり
かきりのおり心ししりのこししゆをよひてみやへ申
《いまはとてもゑんけふりもむすほおれ たえぬおもひのなをやのこらん》　とよみたりし御返事によ
さんの宮より　《立そひてきへやしなましうき事を おもひみたる、けふりくらへに》　とありしこそ
女三のみやのけふりくらへと申けれかしは木にはた
よりあることは也そのやまひのうちにみやかほるたいしやう
をうみ給いし也けんしは我かこならね共人のおもわんことを　」一〇オ
おほしてもてなし給ふつゐにそのま、よるなとたち
とまり給ふ事なかりしかは宮の心中そいとをしき御
身のうさをなけきしつみ給ふ程に御心ちもれいさまにも
おはしまさすこれも御物•けゆへ也すてにかきりとおほし
めしてか、るついてにとさしも物はかなくかよわき
心に御身のうさをおほしめしとりてち、いんのうへ
申させ給て御くしおろさせ給ひし也これをき、てかの
大なこんいと、やまひおもりてし、給へるかきりのおり
夕きりの大しやうはかの大なこんにはいもふとむこそかしくもひ　」一〇ウ
のかりはいもふと也いとなかよかりしかはよひよせてさま〳〵
いひおきかの我身の事をもかたはしいかきかせてついに
おやにもさきたちてうせぬさて女三の宮は心ちす
こしよくなり給ぬかの若きみうつくしくおはし
ませはけんしいとあわれにおほしめしてかしつき給ふ
いか、のいわひのおりかの若きみをけんしかきいたきみ
やの御そはへ人のなきまにさしよせての御歌に
《たか世にかたねをうへしと人とは、いか、いわねのまつはこたへん》　との給ひしかは宮いふかきり
なくはつかしくおほしてひれふし給へりさこそは　」一一オ
はつかしく心うくおほしけめこれそいか、いはね
のまつといふは何事そというふしんあるへしかし
は木のまきに見えたりゑもんのかみうせにし事春
なりされはち、おと、なけき給いし歌に
《木のもとのしつくにぬれてさかさまに かすみのころもきたる春かな》　とよみ給ひし也これらを
おもふへしされはかしはきにはけむりくらへいはねの
まつたか世にまきしたねいかのいわひもゆる思ひ付へき也

第廿二よこふゑ　《よこふゑの世のうきつまに見しゆめを あひ見しことのたまのおにせん》

此まきをよこふゑといふ事かのゑもんのかみ•きたのかたおち
はの宮をは一てうのみやとも申ゑもんのかみうせてのちあ　」一一ウ
われとおほししなかのかたみなれはゆふきりの大しやうかの
一てふのみやへあはれにかす⸨か⸩なる御とふらひにまいり給ふ
ほとにした心なきにもあらす八月なかはの月ことにおもし
ろくあわれなるにあくかれ出、大しやう此みやへまいり給ふ
御は、みやす所はわこんひきみやは御ことあそはしてなかめ
給ふおりふし大しやうまいりてなんめんのみすのまへこすのこ
のうへにおはしますうちよりふへ•とりもてことにつたはるへき
よしをもの給いしなと、おもひ出、ふゑ•ねとりふき　」一二オ
すさみ給ふさふれんをふき給いてみすのうちをわりなく
す、め給へはものおもへるかほなるとかたはらいたけれ共すへ
つかたをひき給ひし也そのおりうちよりの歌
《よこふへのしらへはことにかわらぬを むなしくなりしねこそつきせね》　とのうたゆへに此まきをよこ

ふゑといふ也さて此ふへをはやかておくり物にとて大しやうのかたへ
たてまつり給ふこれなんやうせいゐんの御ふへといへり
たいしやう我こしゆくしよ三てうとのへかへり給てすこし
まとろみ給いたるゆめにゑもんのかみありしながらの
すかたにて此ふへはおもふかたことにはんへる物をとて　」一二ウ
《ふゑたけにふきよるかせのおとならは　すへのよなかきねにつたへなん》　とこのゆめを御らん世てかの
ふゑをすへのよにはかほる大しやうゑつたへ給ふと也つゐにつたへて
こそかほる大しやうをはよこふゑの大しやうとも申けれそのほとの
ことはにふへおちはゆふきりさても此まきにかほるふたつに
なり給ひしかしはきの一めくりのぶづしにもおやたちかきり
なくなけきとふらい給ふ六てうのゐんはさま〳〵なけきとふ
らい給ておほしめし出し事さへあれはあわれにおほしめして
かの若きみの御かたよりと心さし給てこかねひやくりやうをこ
とさらにとてつかはさる人ゝはこゝろをしらねはおやたちを　」一三オ
はしめたてまつりあわれかたしけなき御なけきとよろ
こひ給ふこかねといふ事あらは人こそしらねと思ひよるへし
此まきにたかんなといふことありしゆしやくいんの御かたより
たけのこを女三のみやへまいらせ給ふによ三の宮の御
くしおろしてのちには入道のみやと申にうたうの
かたへまいらせ給へるを此若きみとりもちてあそひ給いし
なり所もそひたりしかはたけのこところなといふこと
あるへし

ならひすゝむし《すゝむしの花のやとりは秋のよのけさあらたなる月のいろかな》　」一三ウ

此まきをすゝむしといふこと八月十五や月おもしろく
すみわたりてかきりなくあわれなれは六てうのいんは
うそふきなかめ給ふ入道の宮の御かたへおはしまして
月御らんするに御まへのせんさいにはなれたるむしとも
のなかにすゝむしの花のなかになき出たれは
《おふかたの秋をはうしと見しかとも　ふりすてかたきすゝむしのこゑ》　とよませ給ひし歌ゆへなり
くまなき月ふりすてかたきといふ事はすゝむしにおも
しろかるへきなり

第廿三ゆふきり《夕きりに色こきいねになくしかのおちはのみやはおのゝやまかせ》　」一四オ

此まきを夕きりといふこと大しやうおのにてよみ給ひし歌に
《山さとのあわれをそふる夕きりにたちいてんかたもなき心ちして》　この夕きりをまめ人といふ
ことありなんすへからすこれは心さたまりてそゝろかす
まめなるおとことといふ也此まきゆへにこそこの大しやうをはゆふ
きりのたいしやうともいひけれ大しやうのにのかよひちはか
の一てうのおちはのみやにふかく心をかけ給ふほとにその
比かのはゝみやす所一てうのみやにてわこんひき給いし
人なりものゝけにわつらいていたくはつらわしかりしかは
宮をもつれたてまつりておのといふ山さとにかやうのおり　」一四ウ
のよふにやもち給へる所へうつろはせ給ふ大しやういとしの
ひておはしたり御むまにて出給ふ道すから秋ふかきの
山のけ色すこしあわれ也おはしつきてまつかの御心ち
とふらひてのちひめみやおはしますかたのすのこおはし
まして御すひきかつきせうしやうのきみと申女はう
をよひ出してなにやかといふにその日も程なくくれて
きりふかくたちこめてまかきのしかむしのねになみたを
もよをすたきのねとりあつめてあわれにてかへらんかたもな
き心ちしてうちかこち此うたをよみてその夜はとまり　」一五オ
給ふそのことは夕きり秋ふかきの山まかきのしかむしのね
たのおとおちはなとゝいふ事おのに付へしあか月かへり給ふ
おのへ文たてまつり給ひたる御かへり事は宮はいとゝ物うくはつか
しくおほしめしてかき給はすいかゝせんとてみやす所くるしき
心ちをしいてかき給ふ御らんする所をきたのかたやはゝ
御らんし付てうしろより此文をとり給ふかゝるまきれに

その夜はおのへもおはしまさゝりしをはゝみやす所かろ〳〵
しき御なさてもありぬへしうすきかたにやとおもひな
されていと、心ちもくるしくよわりはて、つゐにかくれ　」一五ウ
給ふいと、つみふかゝりし宮の御ためかなと覚たり
さて四十九日すくるまゝにきやうへむかへたてまつりて
三てうの上と十五日つゝかよひ給ひし也又此まきに
つるはみのもといふ事ありこれ人のいゝ出したらはおちは
の宮のつかひ給ひしせうしやうのきみといひし女
はうはこみやす所にもゆかりあれはかくれてのちうす
すみそめのしゝみたるもからきぬをはきてきちやう
ひきよせてこそ大しやうのとふらいにおはしましたるに
たいめんせし事なれは此まきにくるすといふ事あり　」一六オ
おのにとまり給ひし夜いたくしのひ事なれはのりておはし
たるむまなとつなくへき所なれはわかもち給へるとこ
ろくるすのしやうへむまともおゐてゆきてあかつき
むかへにまいれとの給いしなりされはおのにはくる●ま
むまうつしのくらといふ事あるへしその比はふかき秋也
　第廿四みのり　《みのりするたき、つきにしゆめのよを》
　　《一よ〳〵とあけくれのゆめ》
このまきをみのりといふことむらさきの上御なやみ大事
にて年月かゝせられ給ひしせんふのほけきやうのく
やうにいかめしき大ほうゐありた木、のきやうたう　」一六ウ
なとありていとたつとしほとけのみのりなれはいふへし
かくれ給はんとてちかき比はむけによを心ほそくおほしめて
御こなともおはしまさす此よにはあさかりけりちきりの
ほとおほしめしられていとあわれにて此事あんの
ことくさかしくこその給ひおかねともやう〳〵心あてとも
しらせ給ふ事もいとあわれにてさふらふかきりの女はう
たち又御方〳〵もあわれにありかたき心の程をいとをしく
おもひ給ふへし三の宮（二ほう一五）とひめきみ（一品の宮）こそあさゆふそたて
たてまつり給へはみたてまつらさらんほとの事あわれにて
三の宮を御まへにすゑたてまつりわれなく我なくなり　」一七オ
たらんときは此たひにすみ給いてこのむめとさくら
をはかたみにとりわけみ給へと申給へはおさなき御心にも
いたくふしめになり給て御そてをまさくりてまきら
かして立給ふ此ちうくふにあかしの御はらむらさきの御やうしよろつ申おき給ふらんす
こしおきあかりてちうくふへたいめんしたてまつり給へは
いん御らんしてけふはいとよきひ也此御まへにてたより
なきにやとの給へはむらさきのうへ
《おくと見るほとそはかなきともすれは》《かせにみたる、おきのしたつゆ》　とよみ給ひし也かくて　」一七ウ
日をへておもり給て八月なかはにかくれさせ給ふゐんの
心中おもひやるへしもしやとまほり給へともかきりの
さまはしるかりけれは御くしおろさむとて思ひ立給ふあけ
くれの御心まよひゆめうつゝわきまへかたし日比なれ
つかふまつりし人さらにおもわんかたなくて物覚たる
人一人もなし中〳〵にいんそ（合）御心つよくもてなし給い
て大しやうのきみにの給てて事共おこなはせ給ふ
此大しやうむかしの秋のあしたかとよ風のまきれに
のそきて見たてまつりし御あさかほいかならんよにかと　」一八オ
おゝけなくおもふまてはなかりしかともわすれかたく思ひ
たてまつりしかは御かほをつく〳〵とまほり給ふに
いまならてはとおほえて何心なくうちふし給ふ御かほ
いとゝひかりさしそふ心ちしてむなしき御からに
わかたましい●入心ちせしそはかなかりしさてはかなく
はいになしたてまつりて七日〳〵の御ふつしものこり
すくなく秋ふかく風はたさむくふきしほれて
物さひしき夕くれにおふとのより御ししやあり（むかしの御こしうとなり）

《いにしへの秋さへいまの心ちして ぬれにしそてに露そおきそふ》 此心わむかし•大しやうの御は、 」一八ウ
あふひの上のかくれ給ひしも此比の事なれはおほしめして
よみ給ふこと也ことにあわれにやさしくて御返事に
《露けさはむかしいまともおもほえす おふかた秋の夜こそつらけれ》 との給いし也此御なけきより
御すのほかへも出給はすたゝおほしめしほれたる人に
見えなはおこかましかりなんとおほしてこれやかせんてん
のゆめにたる心なるらんとくもかくれ此御なけき
ゆへそかしそのよのすへつかたかとよちうくふより御六てうのみやす所の御よめ也
つかひあり 《かれはつるのへをうしとやなき人の あきに心をとゝめさりけん》 此むらさきのうへは春
のあけほのをめて給ひしゆへにかくよみ給ふいとゆへ 」一九オ
ありてそおほゆるみのりにはたゝいつくまてもとしをへ
しわかれなれはかなしきこゝろね付へしそのみのり
のほけきやう•御くやうはは也御かくれは八月なかはなり
まことやはるのみのりに花ちるさとの御かたへ御ししやありし御
かへり事にはなちるさと 《むすひおくちきりはたえし大かたの のこりすくなき御のりなりとも》
といふ歌もありそのほとのことはに御のりあけくれのゆめ
そきすつるくろかみ秋のわかれなといふへし此まきに
さしたる事はなしいつくもわかれのきなり

第廿五まほろし 」一九ウ

このまきをまほろしといふことけんし•此物おもひになき
しつみ給ひてそらをうちなかめて 《おふそらをかよふまほろしゆめにたに みへこぬたまのゆくへしられす》
かやうによみ給ひしうたゆへ也かくれ給いて又のとしの
はるのひかりを見給ふにも春に心をしめ給ひし事
おほしめし出てあわれなるに三の宮御かたみのこうはい
にうくひすのなきけるにもしらすかほにてきゐるとな
かめ給ふうゑし人なきはる共しらす大かたの春に
ほのめかされてにやかはさくら花さくらさきみたれて
ちるさくらあれはさくさくらの山とみわたされていか、 」二〇オ
あわれのあさからさらんほんかに 《さくらさくさくらのやまのさくら花 ちるさくらあれはさくさくらあり》 さて
ふちやまふきの心ちよけにひらけはしめたるにもむかし
心にそみてうゑおき給ひしに見る人なくてちりはてん
事よとあわれにて 《いまはとてあらしやはてんなき人の こゝろとゝめしはるのかきねを》 とよみ給ふ
ひやうふきやうの宮と申たてまつるはほたるのみやなりまいり
給てこうはひのもとにうそふき給ひしに
《わかやとは花もてはやす人もなし なにゝかはるのたつねきぬらん》 とよみ給ひしもあわれなりし
御心なりまほろしのはるにはかたみのむめ桜なといふ
事あるへし五月雨になりてはいとゝはれまなき心ち 」二〇ウ
なるに•大しやうのきみまいり給て御物かたり申給ふに
ほとゝきすのなくを 《なき人をしのふるよひのむら雨に ぬれてやきつる山ほとゝきす》 又かものま
つりにいにしへのみおほしめし出ゝいとさひしくまし〳〵け
れはちうしやうのきみといひし女はうはむらさきの
うへの御ことことにおほしめしたりし人也けんししのひ〳〵に
おほしめしゝか共おさなくよりたて給いしかはことのほか
におちたてまつり給てうちとけ給はさりしかは御かたみ
とあわれにて此人はかりは御らんしはなたすもやおはし
けんまつりのひひるねしたる所へおはしましたりき 」二一オ
おきあかりたるにかたはらなるあふひを御らんして此かさし
よなこれをさへわすれけりとの給いけれはちうしやう
《さもこそはよるへの水にみくさいめ けふのかさしのなさへわするな》 と申たりしもやさしかりし
事なりひくらしのこゑをきゝ給ふにもかことかましきむし
のこゑかなとうらみ給ふ•にほたるのとひかふを御らんしては
せきてんにほたるとふとめつらしからぬふることさへおほしめ
し出ゝ時そともなきとうらみ給ふ七月七日には御あそ
ひもなしほしあひ見る人もしゑたをかわしし御ちきり
おほしめしいて、 《たなはたのあふせをくものほかに見て わかれのにわにつゆそおきそふ》 とうらやま
まれ給ふかくて八月十四日御一めくりなれは上下いもゐし 」二一ウ

てこくらくのまんたらをかきおかせ給ひしをくやうを
せさせ給ふかのちうしやうのきみあふきにかき給へり
《きみこふるなみたははてしなき物をけふをはなにのはてといふらん》　とかきたりしを御らんしける
心中さこそおはしけめ九月九日にはわたおほひたる
きくを御らんしてもひとりたもとにかゝる秋かなとかなし
み給ふかみなつきには大かたのそらもはれまなくあわれ
もことにふかくてふりしことをうちなかめまほろしと
いふうたをはよませ給ひし也十一月とよのあかりには　」二二オ
人しれすむかしの事おほし出てひかけを見すとこ
い給ふ御ほんいとけ給ふこともちかき御こゝろにや御まへに
二三人さふらはせて御ほんこともひにたきすて給ふにかの
すまのわかれのおり書かわし給いし文のたゝいま
のやうなる御すみつきを御らんしてけにふてのあとはち
とせのかたみなりかく此世のからのわかれをたにもなき
給けんよと御かほにおしあて給ふにあめのことくふりお
つる御なみたをつゝみかね給ていかならんみちまてとやお
ほしめしけんふるき文ともをかきあつめてひきむすひ　」二二ウ
てかきつけ給ふ《かきあつめ見るもかなしきもしほくさおなしくもひのけむりともなれ》　とよみ
給いし御心のうちおもひやるもせんかたなしさむき御ひと
りねいとゝねられ給はすして御てうつめして御おこ
なひし給ふにゆきいみしくふりてさむさもわかなきに
うつみたるひをおこして御ひおけたてまつるいにしへより
の事ともおほしめし出るなかにも入道のみやのわたり
そめ給ひしはしめの比はことはの色にも出し給はさ
りしかともあちきなのわさやと事にふれておほした
りしそかしさま〳〵なりし事共忘かたきなかにもゆき　」二三オ
ふかくふりたりしあかつきかたたちやすらいし身さへ
しみこほりたりしになきぬらし給ひたりし御そ
てをひきかへし給いたりしおもかけいかならん世にか又
みんとしつのおたまきならね共むかしをいまにくり
かへし給ふ御ねんしゆのたまのことくにおちちる御なみたは
御まへにさふらいし人ゝのそても所せはかりし事にや
たうしにさかつき給て御くやうはてゝのち出給ふ
御かたちいとゝひかるやうなりしそかしたうしのさかつき
のつゐてに《はるまてのいのちもしらすゆきの中にいろつくむめをけふかさしてん》　とよみ給ひし　」二三ウ
こそくもかくれの御心ちなりけれ正月の御ひきて物
御こたちかんたちめなとのかたにてとゝのへおかせ給いて
けりみのりまほろしの二くわんはいつれもあまりおも
しろけれはとりわけたる事なし
　第廿六くもかくれ
此まきはよにひろまらすおふかたくもかくれはとんせい
の事なれはひかるけんしと申はくもかくれよきたより
なりひかりかくるゝおもひゆへなといふへし
　第廿七にほふひやうふきやう《かほる大しやうともいへり》　」二四オ
このまきをかほるともにほふ共いふことは三の宮と申て
むらさきの上やしないたてまつりて梅桜をゆつりた
まいしはあかしのちうくふの御はらけんしの御まこ此
みやけんふくし給てはひやうふきやうと申て御かたちす
くれて心花やかにしてかろ〳〵しきまてそおはし
ましけるかほるちうしやうはかの女三の宮の若きみ
人めにはけんしの御こまことはかしわきの大なこん
のこそかし此きみもけんふくし給てれいせん
いんにけんし此きみをは申おかせ給ひしかはよのおほえ　」二四ウ
かろからすいんにのみさふらいていとかたしけなく
おひ立給へりおのつから御かふはしく此よのかほりならす
御みうつくしくてありかたけれは三の宮うらやみ給て

わさとこのみてはるはまかきのむめをかさして御身
にふれなつは花立はなのそてなつかしく秋はさかりの
ふちはかまおひをわする、まきくまてもにほひを
御身にあつめ給へはおのつから御身にほひかふはしくおはし
ませは人、にほふひやうふきやうと申ける此かた〳〵そ
けんしの、ちには立つ、き人の心をもみたし給い　」二五オ
しされはほとけのかくれ給ひしのちあなんそんしやを
ほとけの二たひしゆつせし給へるかとおもひしことく也
されはくもかくれなとのにほひにはにほひをあつむると
付へしかほるにはおのつからかほるにほひなと、いふへし

ならひたけ河

此まきをたけ河といふこと《たけかわのはしうち出し一ふしに ふかきこゝろのほとはくみきや》とよめる歌ゆへ也ひけくろの大しやうをはのちのおと、とてくわんはくもち給ひしそかしうせ給てのちひめきみたまかつらの御はらに○しよおはしますさかりに　」二五ウ
なり給てうつくしくかほる大しやうのいまたちのし
しゆとておはせし比このあねきみを心かけてよみ
給ひしうた也此とのへおはしてひめきみおと、これも
いまたとうししゆとておさなかりしをその比遊いて
たけかはなとうたひてよみし歌也又をなしくゆふ
きりのおと、くもゐのかりの御はらくらんとのせうしやう
といひしも此ひめきみを心かけてある夕くれに此
ひめきみたちにはさくらをかけ物にてこをうたせた
まひしをみていと、心をつくしたりたけかはにこと　」二六オ
いふこと此心なるへしこのことはにはるの夕くれ　花のかけものかひまゆなと、付へしされとも
此人、こいもいたつらことにてあねきみれんせんいん
へまいり若きみなと出き給ふいもふとのきみはうちへま
ゐりては、のないしのかみゆかりゑてないしのかみ也

ならひこうはい《こうはいの色におとらぬ花のかは しろきむめかやふところのかみ》

此まきをこうはいといふことその比あせちの大なこんとき
こへしはゑもんのかみの御おと、そかしよの覚いみしく
何事もはく〳〵しくて時のもてなしたてまつる大しん　」二六ウ
になり給へはこうはいのおと、共此人と心へへしきたの
かたはひけくろの大しやうのむすめかのひとりのはいかけ
し人のはらそかしまきはしらはなれかたくせ
しひめきみ也ほたるひやうふきやうのみやへきたのかたに
なりてしを宮かくれ給てのち此とのへおはしきみや
の御かたみにひめきみ一所おはします此御かたのにわ
におもしろきこうはいありこれをこうはひの御かた
と申てさてこうはひといふち、たいなこん此むめ
のゑたのおもしろきをおりて御このきんたちいまた　」二七オ
わらはてんしやう人のほとなるを御つかひにてにほふひやうふ
きやうのみやの御かたへくれなゐのうすやうに文かきてたて
まつり給ふ《心ありてかせのにほわすその一むめに まつうくひすのとはすやはある》と申されたりし也
みやいとけふありておほしめしてつねに御ふみなとあり
しかともまことしきこともなし四十四てうのほか
にすもりとておほつかなき所〳〵をせいなこんかつ
くり入たると申事ありそのうちに此人、の事ありと
いへり又かほるならひにこうはいたけかはともいへり又
たけかわをまつ●いふことありおなし事としるへし　」二七ウ
一　うち十くわんのふんはしひめ《うはそくとも いへり》《はしひめのきぬにそひふし ひくひわのはちかあふきか 月をまねくは》
此まきをはしひめといふ事かほる大しやうのうたに
《はしひめの心をくみてたかせさす さほのしつくにそてそぬれける》　うちのはしひめほんせつ
あり又うはそくといふ事うちにふるきみやと見給ふに
此宮はきりつほの八つのみやけんしには御おと、そかし

れいせんゐん御くらひのおりしゆしやくいんのきさき
よこさまにおほしめしかへてこの八つのみやを御くらひに
立たてまつらはやとくわんたてありその心かまへや
もれけんけんしなとも心よからす思ひたてまつりて　」二八オ
よにおほしけたれておはしけるか八てうに御いへありて
すませ給ふ此八てふの御所さへやけにしかはいとあさまし
く宮この御すまいもむつかしくおほしてうちに山さ
ともち給へる所にうつりすませ給ふそれよりうちのみ
やと申やかて御くしなとおろしてこれたかの御この
おの、山ちのあとをもたつね給ふへきにいといつくしき
ひめきみ二人もち給ふか見すてかたくおほしてそへ
なからおこなはせ給ふ大かた此宮はしよたうのたつしや
にておはしけるほとにかほる大しやうとくゐまいりてものなと
ならひたてまつりなつかしく思ひたてまつりかよひしほとに
ひめきみたちにもおもふ心ありてはしひめの歌をもよめる
なり此ひめきみたちのは、きみは大しんの御むすめにてお
わせしかいもふとのきみをうみたてまつりてやかては
かなくならせ給ふそのま、宮ひしりにてそへなから
おこなはせ給ふひしりのみやといふ事を人いふ共うた
かふへからす此まきにありあけの月をまねくといひて
よろつやさしくおもしろき事にする也かほる大しやう
その比はさいしやうのちうしやうにておわしけるかこのひめ
きみたちいかにしてかなとゆかしくおもふほとにふかき
秋のさひしさ山さといかにと思ひやりて此宮へおもひ立
てまいる道すからやまふかくなるまてに風のおとひや、かに
物かなしく何となく袖もいたくぬれ給て
《やまおろしにたへぬこのはのつゆよりも　あやなくもろきわかなみたかな（ちかく）》　とくちすさみてむまにて
山さとへ入給ふ程なくなるま、にもの、おとかすかに
きこゆ山さとのつねの人のあそひにはあらすわふしき
てうにしらへてひきすさ□（み）たるはちおとたえ〳〵にきこ
ゆしやうのことといとねたかくおもしろくてかわおと　」二九ウ
此（ひ、き）（紙）まつかせおりにあひたる心ちしてむまひきと、
めてき、給へは此宮のひめきみたちのあそひ給ふなるへし
やわら入てとのい人にたつね給へはみやはうち山のおくにたつ
ときひしりありしきにあて、ねん仏をつとめ給ふこの
はうへのほり給ふおりふしなれは御るすにてかすかなり此（御）
とのい人に心を合てのそき給へはいとあわれにすこけにて●
●（み）すたかくまきあけてはしらかけにゐかくれてひわ
のはちをまさくりにしてくもかくれたる月をさ
しのそきてあふきならてもまねくへかりけると　」三〇オ
の給へはいま一人はことの上にかたふきかゝり入月をまねく
とこそいへさまことにもとてうちわらゐなとし給へる
けしきともいひしらすけたかくうつくしく身に
しむはかりおもふとりわけあふきならてのことはのおも
かけはまことしく思ひみてあかつきにかへりうちといふ事
には山さとさひしきすまひわのはちおとありあけ
の月をまねくとのい人かつらひけ（おもつらひけ）舟さすさほのし
つくかわなみたかきといふ事也此まきにへんのきみと
いひし女はうはかほるのまことのち、ゑもんのかみのめのと
こ也よおとろへてのちにしのくにのしゆりやうのめになり
しかのちにきやうへのほりて此宮にひめきみたちの御う
しろ●（み）にてさふらいけりひめきみたちの御は、かたにす
こしはなれさりしゆへ也さて此みやにて此へんのきみ
此さいしやうの中しやうにしのひてたいめんしてむかし
の事共かたりきかすいとあわれにふしきに思ひて此へん
のきみをものちまてかほるはこくみ給ふかのゑもんのかみ　」三〇ウ

いまわのきはにいかにもして此宮（女三の宮の事）へたてまつれとてへんの
きみめのとこなれはいひおき給ひしことありとてとり出して　」三一オ
かほるにたてまつるからのふせんれうにてぬいたるふく
ろのなかにたまさかにかよひし文の御事五六まい
まてかの御てにてかきたる文ありいかならんよにかたて
まつるへきとおもひしにあひたてまつるうれしさよとて
たてまつるとりて見給へはふうしつけたりうへはしやう
といふもしはかりかきたりあくるもめつらかにおそろ
しくて御らんすれは大なこんのてはとりのあとのやう
にてかのきみのうまれ給へる事のゆかしくかなしき
事宮の御さまかへさせ給へることのあへなくくちをしき事共　」三一ウ
おこま〳〵とかきたるあとはちとせのかたみにやといゝしらす
あわれにてとりて帰りし也かやうの事をとり合うちにての
事を心へてつくへし

第二しいかもと　《しゐかもとそてのしくれの中（なか）やとは むくらのしたの秋のやまさと》

此まきをしいかもとといふ事かほるのうたに
《たちよらんかけをたのみしゐかもと むなしきとことなりにけるかな》　といふ歌ゆへ也此うはそくかくれ
給てほとなくたちてかほるれいのうちへまふて給ふ
に宮いつよりも物あわれなる心ちしてれいの四きの
御ねん仏に山へいり給はんとにやひめきみたちにもの　」三二オ
の給ひおきなとし□（給）小にかほるもみやこにはいまた
いたらぬ秋のけしきおとは山も色つきてなをたつね
きにけりなとなかめおはしたるに宮はまちよろ
こひてあからんあとの事ひめきみたちの事なと
かつ〳〵申おき給ひてそのまゝたいめんもなくて
むなしくなり給いぬあわれにかなしくておもひと
けはかならすおなしいほりになとちきり給し
事おほし出ゝうちの宮いつしかかくれ給てのち
あれはてたる事を御らんしてしいかもとの歌を　」三二ウ
よみ給いし也しゐかもとうちのわかれなとゝいふ事思ひ
あかすへしみやのかくれ給ふ事秋也又うちのなかやと
はつせまいりなと付へし此まきの心二月廿（日）●比なり
にほふひやうふきやうの宮此うはそくの宮にかほる大
しやうまいりかよゐ又ひめきみたちをも心にくき
さまにものかたり申おき給ひしほとに人しれすゆ
かしくおほしてにわかにはせへまいるおほくはうち
のなかやとのゆかしけれはなるへしさて此ひめきみたちの
御かたへも御よふいなとありておはしまさんとし給ひしか共　」三三オ
人めしけくきやうより御むかへの人ゝともまいりあひしかは
つゐにかなはて帰り給ふうちのなかやとゝいふかと此まき
十てうのなかにあまた所ある也これよりはしまりて
なかやとありはつせまいりもあまたあり此まきより
はしまると心へへし

第三あけまき

かほるの歌に《あけまきになかきちきりをむすひつゝ おなしこゝろによりもあはなん》　此うたのこ
ころはうはそくの宮の一めくりにふつしをひめきみ
たちいとなみ給ふかほるもことにけちゑんとてわたり　」三三ウ
給てよみ給ひし也御かへり事《ぬきもあへすもろきなみたのたまのをに なかきちきりをいかてむすはん》
とよみ給てつゐに心つよくてうせ給ひし也御いもふとの
きみおと心さしてのたまひしか共あねきみをふかく
心かけてうけひき給はすある時ふみのかへり事すこし
ことはやわらかなりしかは心やすくておはしたるになか
のきみと一所にね給ふにおとこのおもかけ●（の）しけれは御は
たこそてはかりき給いてあねきみすへりかくれ給ふ
とゝまり給ふなかのきみといひより給ひたれともおもひ
よらさる御事なれはいとめつらかにうらめしくてなにとなと　」三四オ

かたらひおきてかへりてあかつ[illegible]さりところにほふみやに
なかた[illegible]して合•たてまつりてのちに二てうのゐんのに
しのたいへむかへさせ給て若きみなとまふけ給ふ也
さて•みやは御らんしそめて色なる御心にてしは〳〵うちへ
かよわせ給ふほとに御はゝのきさきみかとなときかせ給て
此宮をはすち事におもひ給ふみやなれはかる〳〵しき山
ふみをいさめたてまつりて御心につく人あらはむかへ
給て御らんせよとの給へは御心にまかせぬよかれをな
けき給ふあねきみさはおもひしことゝこひしらす心　」三四ウ
くるしくこれをのみなけきあかし思ひくらし給ふに心ち
も何となくなやましくにほふ宮は御心あくかれ•ていか
にしてかと思ひ給へともはるけなき道なれはすか〳〵とも
思ひ立給はす秋ふかき比なれはもみち御らんせんと出
たち給ふもうちへおはしまさんの心也舟ともかさりふか
くと、のへてあそひ給ふに宮は御あそひに•心もいらすな
かやとにのみなかめくらし給ふかの宮にも今日のつゐて
ありなんその上みちしはのかほるかたより心し給へとのた
まひおくりけれは人しれすしたまち給てこのもとかき　」三五オ
はらひにわのくちはとらせ□すかけさしきこしらへ
給ふ所にうちよりおふみや御ししやとてかんたちめ
宮の大夫なとたてまつりてかろ〳〵しき御ありき人す
くなにてよのためしになりぬへしなとあれは事わつら
わしくて心ならすむなしく帰り給ふまつかたにも
かへるかたにもさこそおはしつらんと心くるしくかの
みやにはちかきほとにのゝしりおはしてむなしく
かへり給ふつらさいわんかたなしけにおとこといふ物は
かくこそありけめ我もよにあらましかはつゐにはかゝるへし　」三五ウ
とふかくあねきみおほしとりていとゝ心ちもよは〳〵しく
なりもてゆきて大しやう殿おはしたるに此なかをたゝ
わか身と思ひてみたてまつり給へと返ゝいひおきて御年
廿六にてかくれ給ふ大しやうかきりなくなけきてすてに
御いゑにこもり給てみやこへもかへり給はすおほけの
事にてはあらしとてかた〳〵より御とふらい共あり比はふゆ
なれは山さといとゝさひしくしてふりつむゆきにあ
とつけてかたしく袖のこほりとけさりしおもかけに
いとゝなけきをくわへ給ふかやうのおもむき心へへし　」三六オ
ふねのうちかくまちかきほとにてかへしなとゝいふ事
あるへしさてもみちにうち河なといふへし

第四さわらひ　《さわらひのはるやむかしのなみたかわ　とへはいわせのもりのさくら木　八宮》

これをさわらひといふ事はうはそくの宮•たのみおほし
めして念仏なとにもこもりいまわのおりもおはしまし
たりししやうにんはうよりなかのきみ•あねきみにお
くれてたゝひとりなかめおはしまし、所へはるのは
しめにわらひつく〳〵しをおかしけなるかこにいれて
たてまつるとてよめる《此春はたれにかみせんなき人の　かたみにつめるみねのさはらひ》　とよみて　」三六ウ
たてまつるゆへ也されはさわらひといふ事はうちに付へし
さてなかのきみははるのひかりを見給ふにもはるやむか
しのとたとられてわか身ひとりをうらみ給ふいそのかみ
ふりにしみやのうくひすにはるをなつけそとなけき
給ふふる宮のうせ給ひしにもやとたちまさりて
あねきみのなけきとかなしみ給ふさて此まきのき
さらきにほふひやうふきやうの宮へむかへられ給ていと
めてたしそのほとのことはにひとりとゝまるふるさと
のあるゝさはらひみねのかすみ又はふるさとのなこりおしき　」三七オ
心ねと付へしうち河にうれしきせなといふ事あるへし

第五やとり木　《やとりきやちとせのまつのつくるまて　都をみしはなこあさかほのはな》

やとりきといふ事かほる大しやうの歌（うち）のふるさとふる
みやにてよみ給ひし歌に《やとり木を思ひしらすはこのもとの
たひねもいかにさひしからまし》（こ）（の）
●の歌ゆへ也此心はうちのお、ひ●きみうせ給てのちと
し月ふれともかほるたいしやうのなけきわすれ給はす
なかのきみはにほふみやのきたのかたになりてきやうにおわ
しませはうちの宮はいと、あれはてぬれはかのみやの
きたの方おほせ合ててらになしてかたはらにしんてん●（を）（紙）　」三七ウ
たて、とき〳〵わたりおはしましてかのむかしの事
かたりきかせしへんのきみもひめきみにわかれたてま
つりてあまになりてしをこ、のやともりになし給ふ
おはしまして御らんしめつらしてさま〳〵おほしめし
出て日もくれぬれはと、まり給ひてよみ給ひし也
さて此まきにほふ宮はゆふきりのおと、の御むすめむつ
のきみにおと、おし合給てときめかせ給ふみやはかのな
かのきみをかきりなくおほしめしてよかれなくあひ
見給ひていつしか物おもひせんことをかなしくこ、ろ　」三八オ
よりほかになけき給ふた、ならすさへなり給ふ八月
はかりよりゆふきりのかたへおはしますにしのたいに（ちうくう）
はかへ（く）やおもひしと返、も山ちをわけ入ほとの心
かろき人ゆへならすくやしき思ひしつみ給ひて
けにあま人もつりするはかり也御まくらをそはた
て、なかめいたし給へはありあけの月もやう〳〵すみ
のほりつ、ひややかなるかせのおとむしのねもむかし
あらまほしかりし山さとのすまひより物うくてそ
よみ給ひし也《山さとのまつのかけにもかくはかり
身にしむ秋のかせはなかりき》とよみ給ひ●（出）し也　」三八ウ
さしもあらまほしかりし山さとのすまひよりはみやこ
すみうきなと、いふことはものうらめしきなと、とり合
てつけへしさるほとにみやかやうにゆふきりのおと、へか
よわせ給ふかほる大しやうよめの事なれはなかのきみ
を御このことくにおほしたる事なれはつねに此みやへも
かよひ給ふことならはよのなかのうらめしき物かたり
なとして夜ふくるまてはしましていか、ありけん
まことにはなけれ共いひよりてましますれいの
うるりかしみとふかき事をみやとかめ出てう　」三九オ
らみ給ふうちとけて心やす（き）なれはみやものとか
におはしましてふかき秋のあわれはものことにもよ
おされてなみたのつゆふきむすふあらしのおはな
物うらにさし出してうちまねくを御らんして宮
なつかしきほとの御なをしはかりき給て御ひわをく
まならすならしてわふしきてうにしらへ●（に）ひき
すまして《秋はつるのへのけしきもしのす、き
ほのめくかせにつけてこそしれ》とよみ給ひ
し也さてひめきみにもしやうのことす、め給て
ひかせたてまつり給ふかやうの事を心へへしこれらは　」三九ウ
あなかちにうちの事にはあらすみやこにい給へる時の
事也かほる大しやうのあかつきのときかのなかのきみ
た、ならすおはしけれはおひのてにあたるなと、いふこと
なり此まきにあさかほといふことありこれも夕きり
のおと、のかたにおはしますときのあさほらけにおもふ
心ちしあれはかほるおはすとてあさかほの花をおりてあふ
きにうへにおきて御物かたりなとをの給ふを見て
《よそへてそ見るへかりけるしらつゆの
ちきりやおしきあさかほのはな》あふきにあさつゆといふ事かほる
といふことにたよりありかやうに此かほるにしは〳〵いひわたり
給ふむつかしくわつらはしくていか、してのかれ　」四〇オ
ましと此うちのきみなとの御は、の御めい也中しやうの
きみとてみやつかへし給ひしかき（し）たの方うせ給ひて
のちうは宮（八）そくのみやとき〳〵御らんしけるにやた、な

らすなりしかは宮かきりなくくやしくおほしめして
ありし事のやうにもあらすおほしてすてにそれはうら
めしくはつかしくて出てのちあるしゆりやうのつまに（受領）
なるいひしら（し）•うつくしきひめきみ（浮舟）をうみたてまつり
ては、人しれす思ひかしつきその、ちいまのこともの出き
たるにもゆめ〳〵おなしさまにもせすしてとし月　」四〇ウ
をふるほとに廿（日）•はかりにもなり給ふいかにしてち、の
宮にしらせたてまつらんとおもひて此きたのかたに
いひよりてかくこそ申せしをおほし出てこお、いの
きみの御かたみにこれをたてまつらんとたい（薫）しやうにかた
り出させ給ひけれは大（薫）しやうもさもとおもひ給ひけるにて
《見し人のかたしろならは身にそへて　こいしき時のなて物にせん》　とよみしかはあひわかれたるの
ちのかたみなと心うへしさて大しやうしたいのひめきみ
にの•（ち）宮を給ていかはかりのめんほくにかあらんされ共なき人
のことはすれすしてうちへおはしけれは此ひめきみはせ　」四一オ
ゑまいり給ひけるかうちのなかやとにてかのへんのあまと
しるへきたよりなれはやとりてものかたりなとするを大
しやうあまきみに心あわせのそ（そ）きて見給へはこひめき
みにもいたくおほえ宮のきたのかたにもにたてまつれは
こ、ろおちゐてついにあふ此人のことそかしあつまやと
もうき舟ともてならひのきみともこれをはうちのなか
やとはつせまいりかたみなと、いふことうちにての事也
さてうち十てうのうちにきくのかけ物といふ事はこの　」四一ウ
まきにかほるを大やけ御むこにとりそめ給はんとて
世のそしりをおほしてねこ（う）この宮の御かたへきくを
見なとの事をおほしめして花おもしろき夕はへ
にてんしやうにたれか候と御たつねありけれはたれかし
かれかしこれかしなと、申なかにその比かほる中しやう
なりとりわけめし出、かのきくをかけものにて御こを
うたせ給ふうちの御かたまけさせ給ふにまつ一ゑたゆ
るすとの給ひしかはちうなこん心へておりてひし
申給へり《世のつねのかきねにさける花ならは　心のま、におりて見ましを》と申されしかはうち御歌　」四二オ
《しもにあゑすかれにしその、きくなれと　□（き）こりのいろはかわらさりけり》　とおほせられてむこにとり
給ふかくてしのひ〳〵にまいり給ふ心やすくとにやつき
のとしのふちのさかりにふちつほにてふちのゑんし
給てやかてそのよ大しやうの御もとへ宮•（うつ）ろはせ給ふたい
しやうになる事此まきより也ふちつほのふちのゑんと
は此事也そのよかのゑもんのかみのつたへしふゑを大しやう
ふき給へり

第六あつまや

このまきをあつまやといふ事かほるうたに《さしとつるむくら　やしけきあつまやの　うたてもかゝる雨そ　そきかな》　」四二オ
此歌ゆへ也これは宮のきたの方かほるにかたり出し給ふ
ひめきみをま、さこんのせうしやうといふ人すてにむこ
にとらんとせしそかしそれをひ□（た）ちのかみき、つけて
ほと〳〵に付ていとよきむこと思ひて我かむすめにひき
こしてむこにとりは、いと、くちおしく覚てみやの
きたの方へつれてゆきてあつけきこゆ此きたのかた
御るすのあいたに宮さしのそかせ給ふとかくいひより
給ひしほとにめのとあさましくおもひては、につけたて
まつるおとろきて三てうわたりにこいへをもちたりける　」四三オ
所へかくしおきぬさて大しやう殿うちへおはしてかのへん
のあまをまつやりてわれもかの三てうのたひ所へおはしたり
とのい人あつまこゑにてたそやとの、しりとかめなとせし
その時の歌也かくてそのあかつき我か御くるまにのせて
うちへつれておはしてすませ給ふその時のことはむ
くらゆあつま屋雨そ、きとのい人なと、いふことあり

雨すこしふりたりし比は九月也さて大しやうはしは〳〵うちへ
かよわせ給ふ也

第七うき舟　」四三ウ

此まきをうきふねといふ事うきふねのきみの歌に
《たち花のこしまか色もかわらしを　此うき舟そゆきてしられぬ》　そのゆゑはあつまやのきみを
かほるいさなひてうちにとりおきてとき〳〵かよひし
ほとにひやふきやうの宮のかのきたの方の御ゆのあひたに
ほのかに見給ひし人をいかなる人ならんとはすれかたく
秋の夕へにきたの方にもとひ給へ共とかくいひまき
らかしてすき行給ふほとに又のとしの正月にみやこの
御かたへおはしましてわかきみのとしまさり給ふうつ
くしみおはしましてうちとけてましますに　」四四オ
うちよりとてうつくしきひけこにこまつにつけたる
ふみをとりそへて御まへなるわらはもちてまいりたり宮
いつくよりのふみにかとてうたかわしさにとりて御らんす
れはいとわかやかなる女はうのて也あやしくおほす大しやう
こそうちへつねにかよひ給へいかならんと心にかけて御けにん
にくわしくたつね給へはしか〳〵と申ありしときほのみた
まひし秋のゆふへおほし合する事共ありてしそのひ□(こ)
はて給ふある時かきのすきまよりのそきて御らんす
れは我きたの方にも覚たり人しつまりてのちに大　」四四ウ
しやうのおはしたるまねをしてみちにていみしくはち
かましき事あり返〻人にしらすましとさ〻や
かせ給ふ御こゑいとよくまねひよせ給ふぬれしめり
たる御にほひなともまかふへくもなしうこんといふ女はう
出〻つかふまつりさてきちやうのうちへ入てた〻大しやうの
おはしたると思ひてうちとけ給へはあらぬ人也あさましく
おもひ給てなき給へともかいなしにほふもかほるもおもひ
やるやうはわかぬちきりとはこれ也あかつき帰らんとおほし
つれともさらに立はなれかたくてまことにしぬへく　」四五オ
おほしまとひて御身をすてそのひはと〻まり給ふその
時こそうこんはしりてあきれあさましくおもへ共おそろ
しき事共をかまへてうこんありけれは心しつかにと
とまりてあさからさる御ことのはをつくせすときのま
も見すはいか〻せんとこかれ給へはおうなもおもふとや
これをいふにやと覚てそらおそろしくかなしけ
れともうちなひきなとせしさてそのあかつきそせんかた
なくかなしなからおのかきぬ〳〵ひや〻かに風のおとも
いとあらく露しもふかきあか月におきわかれて御む　」四五ウ
まにてかへり給ふに宮の御歌　《世にしらすまとふへきかなさきにたつ　なみたもみちにかきくらしつ〻》
ときこへけれは御返事　《なみたをもほとなくそてにせきかねて　いかにわかれをと〻むへき身そ》
なといひかわし給ふおもひわかぬ事なとに付へし人
たかへなともいふへしかくてもなをこいしさはせんかた
なくいか〻すへきやうなくて宮御物いみなりとか□(こ)つけ
給て又しのひて出給ふこ〻の人めもさすかにてかわより
おちに御やとをとり給てちいさき舟にのり給てさし
わたすにはるかなるきしにこきはなれたらん心ちして
いと心ほそしありあけの月すみのほりて水のおもくもり　」四六オ
なきにこれなん立はなのこしまと申て御ふねさしとめたる
を見給へはおふきなるいしのさましてときわきのかけ
しけれりかれを見給へはちとせをふへきまつのみとり
のふかきよとの給て宮　《としふともかわらんものかたちはなの　こしまかさきにちきるこ〻ろは》
との給ひし御返事そかし此うき舟とはさてこそ
うきふねのきみといひけれふねよりいたきおろさせ
給て御やとにて御物いみ三日たはかり給ひたりしかは
心しつかにおはしてあやしきす〻りめし出して御ゑ

なとかきすさみておふなおとこもろ共にうちあそひ　」四六ウ
たるをかきてつねにかくてあらはやと御なみたをうけ
ての給ひし御おもかけさこそわすれかたくありけめ
此いへにあしろのひやうふたてたりしそのことは
す、り　ゑ　かわよりおちのやとあしろひやうふこれ
らはみなうちのよりあひなるへしたとへなくなかき
ひにもろ共になかめ出し給へはゆきいとつもりて
かきのもとなとには春のゆきもきえかたくつもりて
かの我かすむかたを見やり給ひてかすみたえ〳〵に
こすゑはかりそみゆる山はか、みをかけたるやうに　」四七オ
きら〳〵とゆふ日のか、やきたるによくわけこしち
のわりなさをおもひやれはあわれさを覚そへてか
ゑり給ふそのおりの歌そかし　《みねのゆきみきわのこほりふみわけて きみにそまよふ道はまよはす》
といふ歌何事にもおもしろきためしにいふ也これもかわ
よりおちの事なれはとり合て付へし比は春也その、
ち又かほるおはしたりそらおそろしくかなしくてうら
しつまりていたるを大しやうはまとをなるをとさらぬ
やうにてうらむ(む)るに心くるしくていと、心まさりして
•あわれに ふかくおほしてはしちかくうちふしてなかめいたし給へは　」四七ウ
おとこはすきにしかたの事をおもひ出してかたみにと
なかめ給ひし山のかたはかすみ人たて、さむきすさき
にたてるさきもところ〳〵はいとおもしろくみわた
さる、しはつみ舟の所〳〵にゆきちかひたるな
とよそにてはめなれぬ事のみとりあつめたるところ
なれは見るたひになをそのかみ(おい、いきみ)の事のみた、いまの
心ちして又なきなくさめも此よのみかとあわれにて
•こひし かなしとおほしてつねにあひみぬほとのくるしさをこ
とはつきせすうちかたらひて大しやう　」四八オ
《うちはしのなかきちきりはたえせしを あやふむかたにこゝろさはくな》　とよみ給ひし也しらさ
きしは舟なとうちに付へしかく(か)て二三日して
かへり給ふにもおもかけこいしくてはすれかたくおもふも
いとおこかましさてみやはそれより御心あこかれてれゐ
ならすさへおはしましけり文のかよひも所せく
ほと也大しやうのつかひとみやの御つかいとたひ〳〵ゆきあい
しかはそれより事あらわれて大しやうのかたより
とのい人をすゑなとしていときひしくもてなすほとに
き、あきらめ給て大しやうの御かたよりかのみやの事　」四八ウ
をうらみ給て　《なみこゆる比ともしらてすゑのまつ まつらんとのみおもひけるかな》　とうちへ
の給ひおこしたりきことあらはれぬと思ひなけくさま
いとくるしみやの御つかひのあらわれしよりふみのいろは
さくらにつけてあかき色かみ也これもあらはる、こいの
心に付へしさくらにつけしふみ也さてうき舟お
もひみたれていか、せんと身をうらみ給ひけるに宮
おはしてあんなひし給へともとのい人きひしくて
うちへも入たてまつらすとくいして御つかいうこんに
あひたりいつへきやうなれは#ししゅとてうこんととう　」四九オ
しんなる女はうをみやのおはします所へたてまつる
御とのい人むまにのせんとすれはゑのらすれ(さ)はわかくつを
はかせてきぬのすそをとりて立そひてまいる宮は御
むまにてとをくたち給ひたる所へつれてまいりあひて
ものの給はんとし給ふ所もひんなけれはむまもあお
りをしきておとろむくらのしけき山かつのいゑい
ののきの下におろしたてまつりてなく〳〵ものをの
給ふにさとひたるいぬのこゑにおとなふも心ほそくお
そろしくこれらのことは此まきにおもしろきことは　」四九ウ
にてよりあひにもよくはんへるへき山かつののきの下

さとひたるいぬのこゑあほりしくなと、いふ事うき舟
とうちとに付へしさて宮むなしくかへらせ給ふしし
御ありさまをかたりけれはおふなまくらもうくはかり也
かくて大しやう人はなれたるはこそみやもおはしませと
ていそきむかへたてまつりて□（き）よしよをつくり給ふみや
わそれよりさきにむかへとりて心のまゝにとおほして
御めのとのいへ九てうわたりにある所へうつろはせなとして
人しれすかまへ給へはおうなはいかゝなりはつへきとも　」五〇オ
心あこかれまさりてとにかくにわか身をなき物になさ
はやと思ひ立けりことわりかなやかわのおとなみたかき
をきくにも我身のおき所をあわれにてうすきぬ
にはかまはかりきて人のねたるひまにつまとおしあけ
てゆくへきかたもしらすかほにそてをおしあてゝ
しのひねになく〳〵ゑんよりあしをふみおろして
かみにても何ゝてもわれをつれてゆけかしとなけ入●（たる）（紙）
所にかのみやとおほしき人のなをしすかたなるか出
きていさゝせ給へとかきいたきて行ぬこれこたま也とり　」五〇ウ
てゆきてひやうとういんのうしろにおふきなるきのも
とにすて○（おき）たりしをおのゝあまはつせよりけかうに
此ひやうとうゐんにやとりたりけるか見つけてとりて
おのへかへりてさま〳〵かちしてなをしたてまつりい
たはりて人となしてのちこそあまになりてこしやう
ほたひねかいけれはされうちにはこたまといふこと付へし
こたまにとられしは三月すゑなり

第八かけろふ　《かけろふとひかふをみて》

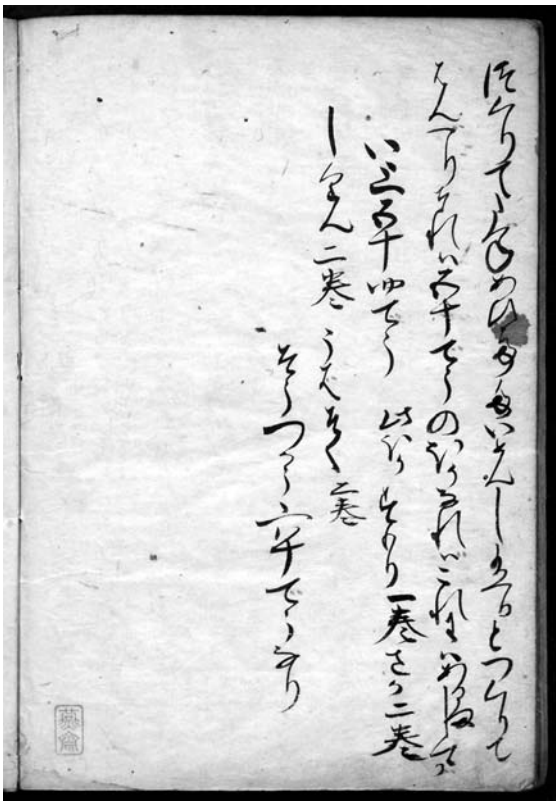
此うき舟あとかたなくうせてのちかほるのなかめ給いし也　」五一オ
《ありとみててにはとられすはかなくて行ゑもしらすきへしかけろふ》

とよみ給しうたゆへ也さてうき舟はからをたにも
のこさすはかなくなりしかはは、のなけきおしはかるへ
し人めもあさましくてのこしおき給ひたる御ふす
まなんとをとりあつめてとりへ●（の）のへおくり出してなきゆ
くすへのけふりとなしはてし也かけろうといふ事
にはあとかたなしみつのあ●（は）ときゑしのこるふすまけふり
となりしなと付へしさて宮はひたすら此なけき
にふししつみ給ふ○（し）しゆといひし女はうあほりしきて　」五一ウ
物かたりし給いしおりの女はう也これをのちにはみやの御かたへ
よひ給て御はゝちうくふの御かたにさふらはせこれをな
きかたみに御らんせし也

第九てならひ　《てならひのうつこをうつすおの山のおちなるさとのうちのやまひこ》

此まきをてならひといふ事はうき舟おのゝあまにつれら
れておのにすみけりあらぬよにむまれたる心ちして
たれに我身の事をもふるさとの物かたりをもいふへ
き□（な）けれはたゝつく〳〵とてならひをしてすゝりに
むかひておもふ事を歌によみしなり　さて此まき　」五二オ
よりてならひのきみといふと心へへしおのゝあま八十
はかりなるはゝをひきつれてはつせへまいりてけかうにう
ちにやとり此あまのあに山にたつときひしりにて
あるを●（も）つれたりけるほとにかのこのもとにあやしきもの
ありなとのゝしりけり行てみれはいとうつくしき
わかきおふなのしろきあやのうつりかなへてならぬに
あかきはかまをきたりあまはせにてゆめを見たて
まつりたりとて此ひしりにかちせさせなとして
つれて行●（て）もてなしいとおしみけるほとに此あまむすめ　」五二ウ
はかなくなりたりしかむこむかしをわすれすして
おのへつねにきたりけるか此人をみてむかしの御かわり

にといひわたりけるをむつかしくおもひてあまの又
はつせへまいりたりけるあいたに山よりひしりくたり
給ひけるにいひてあまになりぬかくてさま〳〵みやこの
事共思ひ出しつゝ身をなけんとて出たりしに宮とお
ほしき人に付てゆくと見しほとにより身の行末も
しらすいとゝなりけりとあさましくて
《身をなけしなみたの河のふかきよに しからみかけてたれかとゝめし》と月のおもしろきにつく　」五三オ
つくとなかめて《心にはあきのゆふへをわかねとも なかむるそてに露そこほる、》秋ふかく思ひやる
へしすむ所はかのゆふきりのみやす所のおはせし山
さとよりはいますこし入て山にかたかけたるいへなれ
はまつかせしけくかせのおと心ほそしかとたのいな
はかりとてわかきおふな共に物うたはせなとしてひたひき
ならす事共をみしまてもとうはうの心ちして
あわれなる月のあかきようちなかめて
《我かくてうきよの中にめくるとも たれはしらむ月にみやこに》ことにふれてみやの御おもかけ
わすら•ぬもあさましくてされ共忘はて給はしと　」五三ウ
おもふもいとあわれ也春にもなりぬれはいとゝむかしの
はるのみこいしくてねやのつまちかきこうはいの色
にもかわらす春やむかしのとこ花よりもこれに
心をよせらるゝはあかさりし御にほひのしみにけるか
やとわれなからあさましくてよみ給ふ《そてふれし人こそなけれ花のかは それかとにほふはるのあけほの》
さて大しやうは思ひかけぬゆかりをき、出してたつね給ふ
おのにはおのには此歌の事はを•思ひよせて付へし
第十ゆめのうきはし《みしゆめのうきはしわたすのりのしは おもはぬ山のつみをされとや》
此まきをゆめのうきはしといふ事けんしわか御さかり　」五四オ
のゑいくわをはしめて御身のさいけいもよにおへほん
たかくむまれ給て御かたはひかるけんしといはれ給て
御心にのこる所なくいみしくおはせし事もたゝ
ゆめのことくにてみな一ふしのゆめのあいたの御なけき
をせんちしきとしてくもかくれ給ふ又かやうにことは
おゝくつくり出せるものかたりもつゐにはてはういむしやう
をしらせんためなれはゆめのうきふねといふ心なりかる
かゆへにはしをことはのやすめにしてゆめのうきはし
いふなりさて此まきに大しやうきゝいたして此てならい　」五四ウ
のきみ•おとゝひたちのかみかこをむかしのなくさめにめし
出してつかはせ給ふを御つかいにて文をおのへつかはさるゝはし
るへなくてはいかゝとてかの人をあまになししそうつに
おほせて文をこい大しやうの御ふみにとりそへてゆきし
なり大しやうの文《のりのしたたつぬるみちをしるへにて おもわぬ山にふみまとうかな》かくの
ことくありしなからの御てにて御にほひのもさなから
なるを見給ひしてならひのきみのこゝろのうち
さこそありけめ御かへりこともいかにそやあきれ給へぬる
やうにてなしとほんには候也　その、ち山ち•露といふ物を　」五五オ
つくりてたつねあひてたいめんし給へりとつくりて
はんへりそれは五十てうのほかなれはこれにはあるましく候か
い上五十四てう　此ほか　すもり一巻さか二巻
しくわん二巻　うはそく二巻
そうつかう六十てうなり
蔵書印　」五六ウ



3 冊目　56 ウ表

担当

上　書誌、翻刻　桐壺～若紫　米田
　　翻刻　末摘花～須磨　中葉
中　伝来、明石～朝顔　米田
　　少女～藤裏葉　中葉
　　解題、若菜上下～紅梅　中葉
　　橋姫～夢浮橋　米田